

第122回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2019年11月11日(月) 14時～17時

兼題「末枯(うらがれ)」

- 川井素山 ○新海苔や便り代わりの潮香り
秋寒や何時しか消えし軒の猫
末枯の尾根に新らし道標
薄紅葉ひとひら浮かぶ潦
- 保井寶正 ○柿落葉さくら落葉の夕べかな
柴又の「う」の字の幟末枯て
ラグビーや外に蹴り出し歓喜満つ
パレットに銀杏落葉の音もなく
- 佐久間喬 ○末枯れて森の静寂ひとしほに
滝音の御堂に響き山粧ふ
うらがれや雨降り続くけもの道
大川の川面波立ち冬に入る
- 丸山酔宵子 ○ぬくもりを指でひと押し衣被
末枯れや風に絡まる縄暖簾
ジャッカルや攻守逆転初トライ
干し柿を吊る軒先に鴉鳴く
- 吉田啓悟 ○ころころにも末枯るるものありにけり
ラグビーのトライの地鳴大地かな
自分のめがねじまんする赤とんぼ
梟のもの知り顔や迷い箸
- 青木英林 ○出雲へと ^{やおろず}八百万の道神の旅

酉の市手締めする ^こ娘の手にタトゥ
大嵐過ぎ去りしのち狂ひ花
末枯れや定年の日々如何にせん
- 山本草風 名ある草名もなき草も末枯るる
苦吟する書齋を笑ふ秋の月
俎板の音早くなる秋の夕
田仕舞し神に感謝の酒ぶるまい

佐久間たか子○即位の日家族揃つておでん鍋
末枯れてモノクロ庭に赤一輪
小春日に変幻自在雲の旅
神無月西風おりし白き峰

渡辺鯨波 ○末枯れや生涯通すナルシスト
末枯れやそつと微笑む八地蔵
病床の子規の心の柿日和
文化の日都バス一日乗車券

後藤克彦 ○鯖雲や太公望の竿多し
末枯れて蔓に残りし烏瓜
残り柿渋か甘かとそつと食ふ
稲架けや残り稲無く役目無く

永井正孝 ○白萩のみだれ合ふ道急ぎ行く
末枯の別れ路に立つ地蔵尊
花芒垣乗り越えて倒れ来る
郁子一つ夕闇み迫る路地に垂れ

原 晶如 ○末枯れやダム湖の碧深まりぬ
紅葉の柱状節理崩れをり
秋うらら火焰街道薪を積む
空堀に日のよく当たる冬の草

次回「萩句会」

日時 2019年12月9日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『年末賞与』 一句
当季雑詠 三句